

には其の方針をも轉換し、或は幾分之れを棄て顧みざりし傾きあり 故に南州先生の進退には、執着、拘泥、こいへるものなく、泰山の雲に横はるか如く、巨然として動かざる處あり。反對の語を藉りて言へば、漠として取り留めず、謂ば自然の成り行きに任す風ありき。

海舟先生は頭と腕とに偉大な物の吸收力と同化力を持ち、自個の周圍に現はれたものは、何者 にも取つて技術、事業、精神の材料とせり。即ち換言すれば、南州先生は他より與へられたる物を以て事を行へる人、海舟先生は自ら得たる物を持って事を行はんとしたる人なり。海舟先生が一つの機會を握りて、之れを放すことなく、智力事業の階程と爲しつゝ其の目的に進み行くことは、宛ら颯風の草を靡かして行くが如し。

時流の人——即ち實際家は、空談を嫌ひ、何事 にも手應へある實正の處に向つて進む。先生は常に大下恐るべき二人として、西郷南州先生と横井小植先生とを擧げ、藤田東湖先生は『眞實に國を思ふ赤心なき人』なりと云へり。南州先生が東湖先生を

以て天下第一の恐るべき人物となし、其次には橋本左内を擧げると其の趣を異にせり。妹婿なる、佐久間象山に對しては、海舟先生は『法螺吹で困る』といひ、古人では熊澤蕃山を推して『儒服を着たる英雄なり』と云へり。海舟先生の觀察が、事變的に傾けるは之を以て知るべし。最も晩年に至り先生が空談家の類となりしは社會周圍の事情にも依る。先生の斯く、達觀卓識なりしは、事物の依て繋る處の眞理を透視し、これを實正、正確ならしむる智惻才能を有せしが爲めにして此の二三の經驗に依り、其の凡てを知ると云へふことは即ち實業家——時流の人の有する特別の精神なりとす。

凡そ時流の人と云へるものは優れたる克己心あり、優れたる自信力あり、其の目的の爲めには如何なる苦痛にても凌ぐ確固不拔の精神あり、先生の境遇は正に此の教育場をなしたり、故に時流の人には、事業其物に對して執着あり、また拘泥あり。若し南洲先主をして幕府の人たらしめ、薩摩の海舟先主に、江戸城明渡しの折衝を爲せしめしならば、死を見ること歸するが如き南洲先生は、或は此所に死せしやも知るべか

らす。海舟先生が此の時進んで死さず、恥と死とを忍ぶ心を以て徳川氏の爲めに計へるは實に邦家の爲めの大幸にして而して偉人が千古に遺したる功績と謂ふべし。

海舟先生は時流の人なれども、亦思議の人にあらざるとなし、思想上のことは、先生が漢詩などにて示したる高尚の志に依て、これを窺ふ可し。去りながら、先生は南洲先生の如く、理想を以て立つ人にあらざる故、學問——修養——精神などいへる方面の智識に就ては多くを物語らず、語るのは實世間の事、経験より割出したる處世上の事などなり。海舟先生の一夕話に、多くの教訓の含まれたるものは、即ちこれが爲めなり。南洲先生の一夕話は、一語一言を苟くもせぬ風あれど、海舟先生の退隱後に於ける一夕話は逸忽の風あり、白眼にして冷視するの風あり、南洲先生の言々熟調を帯びたることきことなく、頗る冷靜なり。之れ海舟先生の時代を達觀して高く標致せるが故なり。

海舟先生は偉人なり。去りながら先生は學識徳望を以て千古に卓絶せる士君子にあらず。アリストートル、ソクラテス、プラトール、孔子、孟子、王陽明の如き學徳の人、

即ち聖人、君子を以て民衆の上に立てる人にあらず。繰返して言はんが、海舟先生はプラトールの『眼の補助も假す、如何なる感官の補助も借らずして眞理に進み、實際に進み得る人』にあらず。一言にして盡さば、高尚な智的官能を持てる、サイアンスの人なり。君子——聖人の素質はあれども、西郷先生よりはより多くのステーツマンなり。而して學術の人なり。智識の人なり。タレントの人なり。先生の力は國家の組織制度の擴張、社會の秩序、形式の整頓など、成る。鋭犀なる理解力、適應すべき熟練は即ち先生の力にして、精神的——哲學的に發達するよりは、智識的——科學的に發達せり。去れば其の行動に抽象の影少く、具象の光の多きは勿論なり。具象的なるは即ち科學なり、科學は活動的なり。海舟先生の前半生が活動的なるは全くこれが爲めなり。

斯くの如く先生は時流の人なり。時流の人は智の人なり。智の人は談判、断引事に長ず。而して其の談判断引には豫め大いなる決断と、細心なる謹慎と、剛毅なる精神と死する覺悟とを具備す。即ち海舟先生には是の精神あり。之れあるが故に、宮島

の談判にても、江戸談判にても、事が容易に運びを得たり。先生の策略には、實に精妙なる精神の作用あり。其精神作用は何時も逆運の際には如何にすべきや、それは「死」なりといふことに多くの思ひを費す。故に重大なる談判事に際しては、先生は何時も逆運の際に處する計畫と覺悟とを極め、棄身になつて働きたり。これ先生が實際上より得來りし經驗——呼吸なり。實に好く個人の心理を自解せるものなり。然し同じ棄身なれども、海舟先生の棄身は、其裏に何時も精密なる仕事の計算あり。精確なる事業の計謀ありたり。此の計算を有し、逆運に所する覺悟ありしもの維新の人物中、先生を以て第一とす。

次に先生の特に秀でたる處は「箇人的注意の周到」なり。極めて些細なる些事に至るまでも自分の事に關してはよく見透しのつく「眼」を有したる事なり。是く自箇計算の明るかりしことは、やがて先生が一派の人々より「奸物」と呼びなされし原因の一つにして、先生は元より「奸物」にあらざれども、才人は兎角奸物に見ゆるものなればなり。

先生の一生中「奸物」と目指されて、その身を危ぶくせしと幾度か知れず、最初は坂本罷馬が先生を刺さんとせしとにて、之は「奸物」と云意味よりも「開國論」を唱へたるが爲なれど、兎に角「怪しからぬ奴」なりしとは彼も是れも同じとなり。次は幕吏より激徒の首魁と見られ、兵庫の塾を解散せしめられたることにして、此の時は生命には別條のなき保證も有りしが、免官となりし上其當時に於ては再び任官となる資格の無き寄合衆に貶されたり。その次は長州に於て、宮島談判を行つた後、長州人より「奸物」を以て目指され、慶喜恭順後、江戸鎮撫に従事中、官兵氷川の宅に亂入し、刀槍雑具を奪ひ去りしとあり。此時若し先生にして自宅に居りしならば、ドサクサ紛れに殺されしやも知れず、幸にも留守なりし爲め命拾ひをしたり。次は山岡鐵舟が先生が幕府の「奸物」と見て、密かに刺さんとせしことにて、これも後に山岡が慶喜恭順の事に連れて先生と深く話し合ふこととなり、山岡より折れて、つひ先生と事を俱し、以て、徳川氏の爲めに盡すことなれり。その外江戸にても京都にても途中狼籍者現はれて、先生を斬らんとせりことあり、小銃を打ちかけられしこともありし

が先生は何時いつも生命いのち拾ひろひをして、無事むじに生き長ながらへたり。先生せんせいか世人せじんより憎にくまれたる程度ていど、味方みかたの佐幕さばく黨たうよりも敵てきの勤王きんわう黨たうよりも害がいのある人物じんぶつとして睨にらまれたる程度ていどはこれにて了解れうかいすれど、其そのの心事しんじを考かんがふる時は氣きの毒どくの感かんに堪たえず。これ畢竟ひつじやう先生せんせいの政見せいけんや主義しゆぎが、中庸ちゆうちゆうの道みちを執とり、幕府ばくふの下臣かしたんとしては、徳川とくがわ氏の社稷しゃしやくも立ち、新日本しんにっぽんの人ひととしては皇室くわうしつを尊つとぶ處ところの世界的文明せかいてきぶんめい國こくにもせんといふ、二つの道みちを歩あゆみ來きたれるが故ゆゑなり。而しかし、前まへに云いへる通り、箇人こじん的注意てきちゆういの周到しゆうたう。――換言くわげんすれば、自箇じこを偉ゐ大だいならしめんとする手段しゆげん交まじりて、それが人目ひとめに觸ふれし爲ためめ、偶々ぐうぐう大きな誤解ごかいを招まねぐやうになりしならん。之これは才さい走しれる人ひと、利口りこうなる人ひと――海舟かいしゆう先生せんせいのごとき人ひとには、免まぬかれ難がたい禍わざはひなり。

明治維新めいしちゐしんの後のち、朝廷てうてい、先生せんせいの功績こうせきを嘉よみて、子爵ししやくを授あづけ給たまはんとせしに、先生せんせいは固辭こじして受けず、伯爵はくしやくを授あづけ給たまふに及およんで、初はじめて之これを受けしを以もつて、先生せんせいの精神せいしんを解かいせざるものは、皆みなな陋劣ろうれつ睡棄すいしすべき心事しんじなりとして之これを排斥はいせきせり。而しかもこれ先生せんせいの箇人こじん的注意てきちゆういの周到しゆうたうが精確せいかくなりしが爲ため――換言くわげんすれば利口りこう過ぎたる爲ために煩わづらひせぬ

行爲かうゐの一端いちたんなり。

先生せんせいは十年じゅうねん貧居ひんきよの境涯きやうがいを出いて、幕府ばくふの兵學へいがく家かとなる始はじめより、一旦たん任命にんめいを受うけると雖いも、何時いつも一度いちどはこれこれを辭退じたいし、再度さいどの命令めいれいありし後のちに、その職務しやくむ及びそ其そのの官くわんに就つくを以もつて法はふとせり。一度いちど辭退じたいし、二度にどの命令めいれいを受ければ、前まへより重おもく用もちゐらるゝは自然ぜんの道理だうりなり。其そのれと同時にどうじに自個じこの位置いち、職務しやくむに就つては、有力いうりよくなる保證ほしやうと裏書うらがひとを保たもつことも必然つぜんの道理だうりなり。即すなはち一旦たんの辭退じたいは却かへつて自個じこの好運かううんとなる、而しかして此この好運かううんを取り留とどめるには、また其そのれだけの決心けつしんと、明斷めいだんと、策略さくりやくと、眼めとが無なければならざれども、若もし逆運ぎやくうんとなれば自じ分の生命せいめいを投なげ出す決心けつしんを以もつて事ことを運はり行く故ゆゑに、如何いかなる難事なんじにても行いへずと云いふことなし。つまり生命せいめいと釣つりかへに、自じ分の好運かううんを試験しけんしつゝ、自じ分の位置いちと職務しやくむとをせり上げて行くものは利口りこう者もののすること也なり。

海舟かいしゆう先生せんせい再起さいきの文久ぶんきう三年ねん、將軍しやうんは先生せんせいを愛あいするの餘あまり、一度いちど諸大夫しよたふに任官にんくわんせんといふ内意ないいを下くだせるが、固辭こじして受けず、後のちに至いたりて事ことなく御作事おんさくじ奉行格びやうぎやく、軍艦ぐんかん奉行びやうぎ諸大夫しよたふ、從五位下じゆいごげ勝安房かつあんぼう守まもりなりしは、丁度ちやうど明治めいしになりて、子爵ししやくを受けず伯爵はくしやくを受けたる

と同じ意味合なり。此の意味合は、即ち先生が自個的注意の周到を物語るものにして之れを世に處する利口なる手段と云はざれば、世に利口な人の種は失はる。先生は斯様に利口なる人なりしが故に、先生と談判し、また取引するものは、到底先生を瞞着する事能はざりしなり。即ち先生の觀察と計算と精確さには、維新の諸豪中、何人も及ぶものが無かりしなり。——南洲先生とても遠くこれに及ばず。

既に物事に就て計算の明らかなる人は、金錢、物品、並に代價を生ずるものを無價値にするやうなことは決してせず。従て名の空なるものよりも事の實質あるを喜ぶ傾向あり。故に海舟先生は他の豪傑の如く、家に壯士を養ひ大言壯言して、以て國政を議し、晨に斗酒を傾け、夕べに高樓に座し、財囊を傾けて玉山崩るゝの態を學ぶ事なし、別の言葉にていへば、眞面目なる兵學研究者の教頭にてはありしが、所謂る壯士の親分となりて、意氣常に軒昂たりといふことは無かりしなり。故に先生は事業家にして、理想家にあらず。腕と頭の人にして、精神、哲學、眞理、超越の人にあらず。形相的意志より成り立つたクリチース(質)の人なり。グレート、マンには違いないけ

れど、其素質は南洲先生など、遠へり。故に、クリチースの勝てる『力』の海よりはイメーヂ的の愛の光を放たざるやうに、海舟先生の性行中には、スピリチュアルの温味、滋味、甘味、嬉し味といへるやうな逸話を拾ふと少し。何處までも眞面目なり。眞面目なる中には悲惨する滑稽あれど、涙を流すやうな喜ばしさはなし。従てその歴史中には豊麗なる色彩に満ちたる戯曲的の分子なし、先生に取りて唯一の戯曲的歴史たるものは、宮島談判にして、それも極めて、悲壯なるものなりき。

凡そ爲政治家なるものは、其の心公平無私、眼中國家國民の存するだけにして黨派もなく、地方もなく、藩閥もなく、一身一家の名譽利害もなく、其の思想は高尚に、着眼は常に遠大普及して、先見の明あり、以て千歳の後、萬里の外に及ぶべく、世間の風潮に誘はれ、世間の論調に導かるゝよりは、寧ろこれが先達となつて、國民をして之が善道に誘引するに足るべき力量を有し、勇氣果斷に富み、實行の能あり、着々大に見るべきもの無かるべからず、而も己れは勢權を得て誇らず、情實の爲めに左右せられず、政權利慾に戀々せず、一時世論と合はざるも怨まず、獨立不羈にして、其の

信念は如何なる脅迫勧誘にも屈することなく、善に従ふことは水の底きに就くが如く、悪と見ては之を棄つること弊履の如く、熱心以て萬事を貫徹せざれば止まず、不變不動決して挫折することなく、然れども、若し國家の安寧、國家の經濟を妨害するものありと見る時は、我意を固執する如きことを爲さず、政事の爲め不正手段を執ること勿論これを爲さざるのみならず、常に平和公正の手段を執りて内亂流血を避け、内争の爲めに外侮を招く如き愚を爲さず、眞正なる愛國心に富みて、天下國家の爲めには、犠牲となりて、之れが恩澤に浴せしむる如き功績を永遠に期し圓滿無垢を以て世を終らんと欲するものならざるべからず。

これら高尚善美の素質は西郷南洲先生にもありたり。勝海舟先生にも亦無しとせず。然も海舟先生の遣り來りたる後を見れば、先生が學術の人、新智識の人、科學の人としての功績は却て前者に勝るものあるが如し。こは南洲先生の徳望の人、學問の人、哲學の人としての功績と相半ばしたると、其量を等しうす。一言以てこれを掩へば、南洲先生は量の人にして、海舟先生は力の人なり。

海舟先生に對する諸名士の

書翰 (書稿順)

凡そ大局の達觀、靈悟明識の點に於ては、明治今日の世いまだ勝伯の右に出づるもの一人だもあるなきが如し。予嘗て勝伯を訪ひ、談偶々百難に處する心事に及ぶ。伯の曰はく、『夫れ唯だ平心か』と。予の曰はく、『これ陽明が所謂簡易、孔明が靜、大鹽の大虛、小楠の自然か』と伯の曰はく、『識らず。唯り予に在るものを知るのみ』と。予は此に於てか直ちに其眞悟に及べるを認識したり。然り此平心なり。此平心を以て天下を見る、百世洞として眼底に通ず、此平心を以て一身を處す、險夷更に胸中に在るなし。然れば不忠と罵しられ、反賊と目指されたるにも關はらず、こゝに百年の大計を論じ、遂に江戸城を引き渡したる處、大觀無量と謂はざるべからず。又刺客あり、伯を刺さんて至る。伯即ち引て彼等を座に直し、茶菓を呈し、微笑を含み、悠々彼

等に説て曰く、『卿等の精神予洵に之を喜ぶ、唯り奈何せん、卿等は誠ありて誠なし、共に百世を談するに足らざるなり』と。而して之を説く諄々。刺客終に服して去る。是れ平心の在る處、學ばざるべけんや。横井小桶も亦た歌うて曰く、『此道懐に在る三十年』と。誠に此道なり。此道なくんば、人、大なる能はず。此道なくんば、人、去就に惑ふ。今や立憲こゝに革り、また無能無識の朽老を以て維持すべからざるに至る。然るを今猶ほ意地穢くも寸命を貪り、潔然江戸城を引き渡す能はず。右盼左顧、醜を後世に残さんとす。追へるものと云はざるべけんや。論者談を求む、即ち秘書官を出し、次官を出し、甚しきは門前に之を拂ひ、敢て自ら接するの勇なく、一室に屏居して獨り罵る。平心の悟なき者と云はざるべけんや。想ふに第二の維新は、事、第一の維新よりも大なり。而して外患また昔日の類にあらず。然るを兩に闘ぐ此くの如く、其悟の足らざる此くの如く、見るく百年を誤らんミす。於是乎勝伯を思ひ、併せて此道の廢れたるを悲しむ。

右は嘗て予が『勝伯の平心』と題して毎日新聞に掲げたるもの、吉本君の來りて、

予が勝先生に於ける所感を求めらる。乃ち復た書して以て之を寄す。事、伊藤内閣讓渡以前に屬すと雖ども、今日の世、猶益々斯道を説くの要を感じるや切也。

明治卅一年十月十日

松村介石識

拜啓、『水川清話』の儀に付御依頼之件は、色々勘考仕候へ共、別に申上ぐる迄の事は思當り不申候。拙者は生來健忘性に而、失念術之專賣家に候へば、水川老伯に拜謁毎に、一言一話實に感服仕候へ共、其感化はすべて無意識となりて相働き、一として記憶中に存するもの無之候、是れ古語に所謂無爲にして化せられたるものならん歟と存候。然し拙者は其記憶の有無に拘らず。老伯の恩澤は日夜感佩致、水川如來と崇め居申候間、右様御承知可被下候。右御照會に對し、貴答迄に御座候也。早々不悉。

十月十六日

井上圓了

吉本襄殿

當今の人にて、海舟翁程奇妙なる人物はあらず、卒爾として之に接すれば、戯言百出人を馬鹿にする横着者に似たり。談轉じて人物評に移れば、當世の所謂元勳元老として罵倒せざるはなく、眼中殆んど人なきの天狗なり。利害には敬く、勘定には明かに知りて知らざる眞似することの巧なる、感じて感ぜざる風の上手なる、是れは之れ宛然一個の狡兒かと疑はる。時勢の變移を察し、氣運の消長を觀し、其間に身を處して圓轉滑脱の妙を得たる、輕業師も及ばず。而も其意見は何時も漠々然として、大霧を隔て、山岳を見るが如し、果して翁は是れ臨機應變の人歟。然り横着なる所あり、高慢なる所あり、狡智なる所も之あり、臨機應變なる所も慥かに之れあり。然れども之を以て、直に翁の品性なりとするは、一叢の荆棘を指して是れ武藏野なりといふの類なり。

能く翁を識るものは、翁の熱誠殆んど落涙せんばかりにして、國事を慨し、國難を憂ひ、人をして愴然たらしむるものあるを知らん。徳川氏の爲め、縁故ある諸華族の爲めに、計ることの親切にして、又た人の情を酌み窮を憐むの懇切なるを知らん。且つ

其の能く他の長所に感服し、南州小桶を呼ぶに先生を以てするが如きは、翁に慢氣あると同時に、慢氣ある者に見る可らざる謙遜なる所、殊勝なる所あるを見る可し、多智、狡に近きものと同時に、膽あり、略あり、義侠の精神あり。世の所謂狡兒に具はる所のものを具ふると同時に、狡兒に缺く所のものをも有す。且つ夫れ翁の政治的經驗は、常に一種の處世的哲理、國家的哲理となりて翁の言行を照らす、翁は機智に實むと同時に臨機應變の徒に望む可らざる本領によりて立つものなり。之を要するに翁の人物は、雜駁にしてノアの箱舟に似たるきのあり。混雜の中に本末あり、不調子の中に調子あり、撞着の中に一致あり、老翁人物も亦奇ならずや。ウアルテール、路易十四世幼年の大宰相マザランを評して曰く、「余はマザランが偉大なる宰相たりしや否やを尋ねることをなさざる可し。其然るや否やを語るものは彼れの行爲なり。之を判するものは後世子孫なり」と。彼れ又曰く「人物の眞價は、其打勝ちたる困難の程度によりて定まる」と。幕府瓦解に際し、翁が裁決せし至難の境界によりて之を見四十餘年間の公共生涯に於ける翁の言行によりて之を見れば、翁の大人物たる、亦知

る可きなり。生は常世の元老に對して、多くは感服せず。獨り翁に向ては推服止む能はざるものあり、生は常に謂へらく、我邦の一大偉人として世界に推出して、耻かしからぬものは獨り此翁あるのみと。

以上は、勝海舟翁に對する愚見の一斑なり、再度の光來を辱うし、尊慮を空うする、能はず記して以て座右に呈す、

十月十七日

人見市太郎

吉本襄様

侍史

拜啓、過日は御枉駕被下候處、失敬仕候段御海容可被下候。其節御話有之候『氷川清話』に關し、左に拙詠を得申候。若し御役に立ち候はば、御用に相成差支無之候也。匆々陸首。

十月廿日

田口卯吉

吉本先生机北

かくばかり いさをしの世に しられずば、

うもれや果てむ 君がまごゝろ。

拜啓、先日は尊來を恭うし難有候。其砌御話有之候勝伯につきて卑見申述ぶ可き由、其後相考へ候得共、既に尊者『氷川清話』に殆んど皆御集めに候間、更に可申上様も無之候。然しながら海舟の號につきては、從來世間にて相考へ候とは全く掛け離れ候事にて、象山先生の座敷の額に海舟の二字有之、何人の書と云ふことは知らざれど、面白き字ゆゑに、老伯も海舟と號をつけれ候由。此事は『清話』中にも御轉載と心得候。然るに、幕府の遺老には、舟の字を號と爲す方々多く、後世より考へ候はゞ、盡く深き意味ありげにて、『幕府遺老舟字考』とでも申す珍書の刊行を計られ難く候。兎角世には斯かる事多く、人物評の十中七八は、崇拜の眼より種々の錦繡を織り出す事かと心得申候。海舟先生御自身も亦斯くの如き御所感は尠からざる儀と心得候。然

しながら明治以前の人の死に絶え候時には、海舟先生の如く人物を、再び見る事は有之間敷と考へ候。恰も今日の人が、大久保彦左衛門を評する如く、本人不相當の賞讃を蒙り候か、或は不相當の筆誅を蒙る事と心得候。其頃には『清話』の如き言は、本人の寫眞となり可申候。小弟只今は此外に可申上儀無之候。謹言。

十月廿日

戸川安宅

吉本先生 硯北

文社益御清健奉恭賀候。陳者『氷川清話續々篇編』刊に付、小生へも何か記憶の逸聞投寄せよとの趣了承仕候。海舟先生は天地の大學問と天地の大才藝とを有するものにあらず候へども、其道念の靈活なると、品識の高尙なるとに至ては、明治現代に於ける第一等の高人物なりと信じ候。維新の三傑たる西郷南州、大久保甲東、木戸松菊の如きも、各々獨得の長所を有し、西郷の雅量、甲東の果斷、松菊の才略當時に逸出致し候得共、各々偏する處あるを免れず候。南州は人を容るゝの量あるも、人を説

るの明に乏しく。甲東は事に臨みて善く斷するも、剛愎自ら用うるの譏あり。松菊は機智敏妙、善く利害を謀るも、大事に任ずるの勇なき、即ち其闕點に御座候。然るに海舟先生に至ては、圓滿靈活入て得ざる處なく、毫も事物に拘泥せず候。雅量あると同時に善く人を知り、事に臨みて善く斷じ、而かも剛愎自ら用うるの處無く、機敏善く利害を料するの明あり。而かも堅忍不拔大事を擔當する處あり、是れ實に先生の人物の大なる處にして小生平生景仰する處此に在り候。併しながら小生か先生の爲に惜む所のものは、先生が幕末の遺老を以て、明治政府に仕へたるの一事に有之候。前年小生の韓京より遼東半島を経て歸京し、先生を氷川の草廬に訪ふや、先生は二十七年の舊作なりとて、左の詩を示され候。

隨國交兵日。其軍更無名、可憐鷄林肉。割以與魯英。

又二十八年二月の作なりとて左の詩を示されぬ。

貨弊非瓦石。濫用或窘迫。我言國財匱。若輩皆嘲噓。再言出帥非。要路亦不憚。病臥數閱月。果知無籌策。衆庶多危懼。浮雲蔽大暉。今哉南州逝。無甲東前知。

何人克其終。唯待天定時。

當時生先は、内閣が無用の干渉を朝鮮に施すとを難じ、また戦後經營の策として滿洲鐵道敷設の權を占め、大連灣を開くの要を語り時の移るを知らず候。而して先生は日清戰爭を非とし、殊に遼東の割讓を非とするの意見なりしとて、反覆痛論致し候。時に小生は先生に向ひ『日本人にして、日清戰爭を非とするが如き、國賊の名を負はん』と言ひしに、先生毅然色を正うし、『國家の爲に利害を論ずる、決して國賊の名を辭せず』と申候。今や東邦の天地を看れば、朝鮮支那の政府官延は露人の抱擁策に陥りて其範圍外に出づると能はず、滿洲鐵道は露人に由て敷設せられ、大連灣は露人に由て開かれんとする實際に有之候。『可憐禹域内。割以與魯英』とは今日の實際に有之候。

明治三十一年十月廿七日早旦

鐵華書院老盟臺

千山萬水樓主人拜具

昭和八年九月一日印刷
昭和八年九月五日發行

氷川清話

【定價金七拾錢】

著作權
所有

著者 吉本 襄
發行者 大阪市西區薩摩堀東之町一五番地 前田千代藏
印刷者 大阪市西區阿波座二番町五番地 堀田助一
印刷所 大阪市西區阿波座二番町五番地 堀田書籍印刷所

發行所

大阪西區薩摩堀東之町一五番地
大文館書店

電話新町四五九六番
振替大阪四二九五四番





